静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）第48号（1998.3）139〜153

きれいになる身体—ウェールズの「ナショナル・コスチューム」

Body Made Beautiful : 'National Costume' of Wales

森 野 和 弥
Kazuya MORINO

（平成9年10月6日受理）

0．イントロダクション

ウェールズは現在、イングランド、スコットランド、北アイルランドとともに行政上は連合王国の一部を成しているが、文化的には、スコットランド同様イングランドとは異なる側面を強く保持している。一定の領土を有し、政治的に組織され主権を有するものを「ステイト」、共通の言語、文化、歴史を有する人々の集合体を「ネイション」であるとするならば、ウェールズは、連合王国というステイト内にありながら、文化的には一つのネイションと捉えることもできる。この様な形でウェールズを考えるとき、その紡ぎ出す「ナショナル・イメージ」は以下のようなものである。ウェールズの「ナショナル・アンセム」とでもいえる「我が父祖の国」（'Yr Hen Wlad Fy Nghadau'）、黒く汚れたたくましい男たちの支配する炭坑、どこまでも突進するバイタリティー溢れるラグビー選手たち、そして男性のクワイヤー。一目瞭然のようにこれらは全て男性的、肉体的な（masculine）もので、女性が関わるものはない。この点では、ウェールズの女性たちは「文化の中で埋没した存在」（"culturally invisible" Beddoe 1986 : 227）だったと言えよう。しかしイングランド、スコットランドとは明らかに違うウェールズ女性の表象というものもある事は確かであり、それは Beddoe (1986) によると5つに分けて考えてみることができる。

1. Welsh Mam
2. the Welsh Lady in National Costume
3. the Pious Welshwoman
4. the Sexy Welshwoman
5. the Funny Welshwoman

本稿ではこの内の 'the Welsh Lady in National Costume' に焦点を当てて見てみることにする。

北から南までウェールズの土産物屋で必ず目にすることが出来るのが、このウェールズの「ナショナル・コスチューム」を着込んだ美しく若い女性の人形である。清潔そうな白い服に赤いガウン、黒いチェックのショール、背の高い黒いビーバー帽（図1）。色鮮やかな衣装を身に纏い、色白で可愛げな顔の「きれいな身体」で異国情緒をそそる人形たち。これがウェールズ独自の「ナショナル・コスチューム」として歴史に登場するのは、しかしながら意外と最近のことで、1834年ラノーバー夫人（Lady Llanover, nee Augusta Waddington 1802-96）がカー

ディフのアイステッズヴォッド（eisteddfod）[1]に提出したエッセイに端を発している。これはつまり、19世紀にラッシュを迎える「創造された伝統」[2] 作りの一環であるわけだが、ここのところをウェールズの事情に即して詳しく検証してみよう。

1．ウェールズの「ナショナル・コスチューム」

まずはじめに、1834年以前の衣装は、なぜウェールズの「ナショナル・コスチューム」たりえないかというと、それ以前にはウェールズ独自の衣装など存在していなかったからだ。ヨーロッパの農民はどこでも同じ服装をしていたのである[3]。De Marly (1986) によれば、17世紀ヨーロッパの一般的農民は、ペティコート、ウェストコートそしてエプロンをしていた。

> The wearing of petticoats and sleeveless waistcoats shows the presence of the common European peasant dress in England, slightly more fashionable than smocks and mantles, but shorter in the skirt than ladies wore, and often covered with linen aprons. (23)

ガウンを後ろで止めてペティコートを見せる着方も、1640年代にネーデルランドから入ってきて、ロンドンの上流階級の間で流行となり、19世紀までには農民の間に広がっていたものだ（De Marly 1986 : 25）。

このベッドガウンにペティコートそしてエプロンの組み合わせは、Ewing (1984) が指摘するように、あるいはホガース（William Hogarth 1697-1764）の数々のエングレイヴィング、リチャードソン（Samuel Richardson 1689-1761）の『パメラ』（*Pamela*, 1740）や18世紀末を舞台とするエリオット（George Eliot 1819-1880）の『アダム・ビード』（*Adam Bede*, 1859）が描いているように、18世紀に入っても、農業労働に従事する女性の典型的パターンだった。例えば、アダム・ビードの母親リズベス（Lisbeth）は以下のような服装をしている。

> ... a pure linen cap with a black band round it ; her broad chest is covered with a buff neckerchief, and below this you see a sort of short bedgown made of blue-checkered linen, tied round the waist and descending to the hips, from whence there is a considerable length of linsey-wolsey petticoat. (31)

19世紀後半から現在にかけての旅行者向けの絵はがきにつきものの外套も、Walker (1814) などを見る限りではイングランドでも普通に見受けられたようだ。カラーの挿し絵が美しい Pyne (1808) の 'Welsh Peasant Washing' では、ウェールズの衣装はなるほどイングランドとは違うと言及されてはいるが、それはウールを使用してあるといった材質の点に限られると述べられている。

2．ラノーバー夫人作の「ナショナル・コスチューム」

この全ヨーロッパ的とでも言える服装を、ウェールズ固有の「ナショナル・コスチューム」に仕立て直したのがラノーバー夫人だった。ここではそのプロセスを簡単に追ってみよう。

ラノーバー夫人ことオーガスタ・ホール（Augusta Hall）は、ベンジャミン・ワディントン（Benjamin Waddington 1749-1828）とジョージナ・メアリー・アン・ポート（Georgina Mary

Ann Port 1771-1850）の間の5女として、南ウェールズ、モンマスシャーのラノーバーに誕生している。母親は遡ればノルマンディー最初の公爵に行き着く家系で、父親も生粋のウェールズ人地主ではない。けれどもウェルシュ・リバイバルの潮流（後述）の中で育った娘オーガスタは、Fraser（1968）によれば、幼い頃から父親の小作人の家（ウェールズ語モノグロット）を訪れたり、ペットにウェールズ語で名前を付けたり、1824年にはLanoverをLlanoverと正しくウェールズ風に綴るように両親に頼んだりと、ウェールズに興味を抱いていた。

1834年には、前述のカーディフのアイステッズヴォッドに、'On the Advantage Resulting from the Preservation of the Welsh Language, and National Costumes of Wales'というエッセイを提出し、最優秀賞を授かっている。実は、夫人は以前から民族衣装のスケッチを書きためていた。エッセイが'National Costumes of Wales'と複数形になっているように、スケッチも何種類かあるが、細かな点を除けば、ほとんど同じものと言っていい(Payne 1964)。これらを総合して、夫人は実際に「ナショナル・コスチューム」を創り上げ、それを様々な「民族的機会」に登場させ、そのイメージを堅固なものにしていく。例えば、1848年、アヴェルガヴニー・アイステッズヴォッドには、4百にも及ぶ馬車がパレードに参加し、女性たちは皆「ナショナル・コスチューム」を着込んでいる。1865年には、夫人はラノーバーの自分の地所にthe Gwenffrwd Millを建て、自分の土地から取れるウールをフランネルに織り込ませ、「ナショナル・コスチューム」を製造している。あるいは、自分の召使いたちに「ナショナル・コスチューム」を着用させたり、その他にもたとえば、アベルカン（Abercarn）のチャペルの開所式には地元の千人もの人々が「ナショナル・コスチューム」を着て参加している[4]。これらに加えて、ラノーバー夫人とグリーンリー夫人（Lady Coffin Greenly 1771-1839）は、「ナショナル・コスチューム」製造産業振興のために、アベルガヴニー・アイステッズヴォッドに新たに衣装関係の数々の賞を設けている（Fraser 1968）。*Illustrated London News* (1845, Oct. 25)によればアベルガヴニー・アイステッズヴォッドは、このような伝統衣装に纏わる賞を設定した唯一のアイステッズヴォッドであったのだが（264）、その一つは、'the best collection of patterns of Welsh flannels in real national checks and stripes, with the Welsh names by which they are known'に対しての5ポンドであった。もっともこれには誰一人該当者がいなかった。前述のようにウェールズ独自の衣装など存在しなかったからである。

このような具合に「ナショナル・コスチューム」は創造されていったわけだが、それではなぜ上流階級であるラノーバー夫人が、農民の衣装に注目したのだろうか。

3．ピクチャレスク

19世紀初頭は下層の生活がピクチャレスクの画家たちの素材として注目を集めだした時期だった。Pyne (1806) (1815) (1827), Combe (1813), Busby (1820), Rowlandson (1820), Prichard (1828)といった、一般大衆を描いたイラスト付きの本が多数出回り始める。パインに顕著なように、これらには働く人々の姿がきらびやかな色彩で描かれていた。一つにはフランス革命の影響もあろうが、もう一つには、社会の底辺に位置する者たちへの視線が、ロマンティシズムの新たな形として登場するのである。18世紀末から顕著になるこのようなロマン主義的民衆観を受けて、たとえばMatthews（1786）は次のように記している。

Simplicity made her lovely appearance in the presons of two modest and handsome

young Welsh females...They were dressed, after the Welsh fashion, in blue jackets, and black beaver hats, with ribbands and roses depending from them, and white handkerchiefs wrapped round their heads and necks. The were comely and delicate without cosmetics — and had a genuine air of conscious and unsuspecting innocence, which a virtuous man cannot behold without emotion, although with the utmost abhorrence of either abashing or alarming. (82-3)

ウェールズの農民たちも格好の題材だった。18世紀末にウェールズを旅行し多くの絵を残しているイベットソン（J. C. Ibbetson 1759-1817）による図3には、当時の農民の女性が戸外で仕事をしている様子が描かれている。ちなみに糸紡ぎは、19世紀後半から現在に至るまでのウェールズの絵はがきに、「ナショナル・コスチューム」と共にお決まりに現れる小物である。女性たちの身に纏っているのは、黒い帽子に外套、後ろで止めたベッドガウンと前に見えるペティコート、そしてショール。これは当時のウェールズの農民を忠実に描いていると言えよう。

ピクチャレスク、あるいはサブライムを求めるまなざしは、画家たちの独占物ではなかった。19世紀にはいると、より多くの旅行者が、「手つかずの自然」、純朴な人々を求めてウェールズにやってきた。しかしその頃には、後述するようにウェールズの農民の衣装は18世紀のものとは違ってきてしまっていた。そこで旅行者たちはイベットソンの農民を自分たちの旅行記の中に新たに創造したのであった。下層の人々の生活を再発見するまなざしは、ウェールズ農民が着ているはずの衣装を彼らに着せることになる。たとえば、イングランド人がイングランドからの旅行者を対象にウェールズを描写した Prichard (1828) では、ウェールズの女性たちが地域ごとに、地域特有の「伝統衣装」と共に描かれている。旅行者の目にはウェールズはイングランドとは異なった情緒を誘わなければならず、ウェールズにおいては地域地域がそれぞれの刺激を与えるべきなのだった。

... maiden representatives in their native costumes, ... the neat maiden of Pembrokeshire, in her dark cloth dress of one hue, either a dark brown approximating to black, or a claret color, ... extreme contrast, the Glamorganshire lass, ... the young woman of Breconshire, with her pretty blushing face half hidden in a handkerchief which envelopes her head, ... Her long linsey gown in pinned up behind, each extreme corner being joined together in the centre, and confined a few inches below her waist ... This fair one takes especial care that her drapery shall be short enough to discover a pretty ankle, and her apron sufficiently scanty to disclose her gay red peticoat with black or white stripes, beneath, and at the sides. Then comes the stout Carmarthenshire lass with her thick bedgown and petticoat of a flaring brick-dust red, ... Lastly, ... The Cardiganshire women's dresses, in fact — generally blue, with red stripes, and bound at the bottom with red or blue tape ... (47-9)

本稿で問題としているラノーバー夫人のまなざしも同様である。彼女の残したイラストはウェールズの農民（女性）を地域ごとにはっきりと描き分けている。ラノーバー夫人の場合はそれだけでなく「グウェントの一部」（"part of Gwent"）といったように更に地域を限定して

いる(図2)。前述したように、ウェールズ独自の衣装などは存在しなかったのであり、ましてや地域ごとに明確に違うパターンが存在していたことはあり得ない[5]。「伝統」発見の熱意が微に入り細に入った描写を創造したのだろう。おもしろいのは、プリチャードとラノーバー夫人の記述が食い違っていることだ。これは皮肉にも記述が想像の産物であることを裏付けているかのようである。

19世紀のイングランドからの旅行者とラノーバー夫人の視点は、しかしながら、全く同じというわけではなかった。イベットソンの農民の衣装が、同じように変容していくわけであるが、ラノーバー夫人には、イングランドからの物見遊山的なアウトサイダーではない、インサイダーのまなざしがあったからである。それはウェルシュ・リバイバルと共有する視点であり、これこそが、夫人が自分の創作に「ナショナル」という形容詞を冠した理由でもあった。

4．ウェルシュ・リバイバル

1751年、ロンドン在住のウェールズ人リチャード・モリス（Richard Morris 1703-79）は、ロンドンに、ウェールズの歴史文化の保存継承を目的としたカムロドリアン協会(the Honourable Society of Cymmrodorion）を設立する。これに端を発し、ロンドン・ウェルシュの間にウェールズの文化的アイデンティティーを求める動きが顕著になってくる。これがいわゆるウェルシュ・リバイバルの始まりである。しかし、彼らはウェールズ人であるという以外、イングランドからウェールズを眺めている点はイングランド人と変わりはない。1792年にはイオロ・モルガヌーク（Iolo Morgannwg）ことエドワード・ウィリアムズ（Edward Williams 1747-1826）が、これもロンドンのプリムローズ・ヒルでゴルセッズ（gorsedd）を行っている。ゴルセッズというのは、古代の詩人の儀式を復活させたものということになっていたのだが、実は稀代のペテン師イオロの創り上げたものだった。ところがゴルセッズはロンドンに留まらず、1819年カマーゼン・アイステッズヴォッドでウェールズで初めて執り行われて以来、アイステッズヴォッドの開会、チェアリング(詩のコンクールの表彰式)などの儀式で中心をなし、ウェールズ内に根を下ろし、「伝統」に欠かせない小道具となっていくのである。そしてカムロドリオン協会のウェールズ版が各地にでき、ウェルシュ・リバイバルは中心地をロンドンからウェールズに移していく（Morino 1995)。

アヴェルガヴニーでも、1833年11月22日アベルガヴニー・カムレイギディオン協会（Cymreigyddion y Fenni, the Abergavenny Cymreigyddion Society）が設立されている。中心となったのはトマス・プライス（Thomas Price, Carnhuanawc 1787-1848）という、ブルトン語を始めケルト文化に造詣の深い博識の学者で、協会の秘書としてその活動に貢献していく。トマス・プライスによってウェールズのジェントリーの間に「伝統」への意識が芽生えていったと考えて良いだろう。事実、1848年プライスの死後、協会は活気をなくし1854年には幕を閉じている。ラノーバー夫人とも1826年ブレコン（Brecon）でのアイステッズヴォッド以来親交を暖めていた（Price 1854-55)。トマス・プライスの協会への手紙に明らかなように、カムレイギディオン協会はウェールズの言語文化を守り、継承していくこと（“the maintenance of patriotism, and the prosperity of our famous old language” Price 1854-55 : 230）を目的とし、それは協会のモットー、“Oes y byd i'r Iaith Gymraeg”（“Long Live the Welsh Language”、ウェールズ語よ永遠なれ）にも表れている。これ以後協会は、1834年11月22日が初回となるアベルガヴニー・アイステッズヴォッドの開催、1836年のウェールズ・マニュスクリプ

ト協会（the Welsh Manuscripts Society）の設立、そして1848年、ウェールズ文学批評における記念碑的存在である、トマス・スティーヴンズ（Thomas Stephens 1821-75）の『ウェールズの文学』（*Literature of Kymry*）の出版などを行っていく[6]。

このカムレイギディオン協会を支えたのが、ラノーバー夫人を中心とする愛国者の集まり、ラノーバー・サークルの面々だった。その中にはラノーバー夫人が、1834年カーディフ・アイステッズヴォッドで賞を争ったグリーンリー夫人[7]や『マビノーギオン』の翻訳で有名なシャーロット・ゲスト夫人などが含まれていた。特にイオロ・モルガヌークのパトロンの一人でもあったグリーンリー夫人は、ウェールズ文学事典にも載っていず半ば忘れ去られたような存在になってしまっているが、ラノーバー夫人自身にウェールズの伝統への興味を開花させた人物とされている（Fraser 1960）[8]。

ラノーバー・サークルは、ウェールズ文化における役割において、前述のモリスを中心とするロンドン・ウェルシュと比較できるかも知れない。両者ともウェールズ文化復興のための協会を設立し、アイステッズヴォッドを主催している。しかし、ロンドン・ウェルシュがロンドン在住でウェールズを遠巻きに眺めていたのに対し、ラノーバー・サークルの主な面々は実際にウェールズに根を下ろしていた。ウェールズの地主の家柄だったラノーバー夫人は、上流階級の子女の常として、家庭で母親の監督の下、英語で教育を受けている。学校に行かなかったが、当時の女性としては珍しく学問的な教育を受ける機会に恵まれていた（教育といえば、上流の娘といえども家政に関するものが一般的だった）。ウェールズのジェントリーはイングランド化されてウェールズの伝統を省みなかったと、とかく非難されがちだが、Clarke（1996）の指摘によれば、ウェールズ出身でイングランドで教育を受けた子弟はイングランドの視点で地元のウェールズを見るわけではなく、かといってウェールズ一辺倒でもなく、コスモポリタンな考え方ができたということだ。ラノーバーもロンドン社交界に出入りするなど、イングランドとウェールズという二つの文化圏に属していたといえよう。このため、旅行者の、あるいはロンドンからのロマン主義的過去への憧憬に留まらず、実際にウェールズの土地に生活の基盤を持つ者にとって意味のあるナショナリズムの形を、後述のように、彼女のエッセイに盛り込ませることになる。彼らは正に内側から、自分たち階級に相応しい「ウェールズ」を、民衆をも巻き込んだ形で構築する必要があったのである。そしてその具体的表象が「ナショナル・コスチューム」だった。

5．「きれいな身体」

それではラノーバーは、民衆をどのようなまなざしで捉えていたのか。そもそも、ラノーバーたちと民衆の間には越えられない溝があった。それはアイステッズヴォッドが、ウェールズ文化復興という当初の目的を忘れ、社交の舞台となっていたことにも表れている。ラノーバー夫人は、夫であり、ロンドンのビッグ・ベンにその名が残っているベンジャミン・ホールと共に、ウェールズ文化の中心にしようとの意図の下、1837年ラノーバー・コート（Llanover Court）を、1845年にはカムレイギディオン・ホール（Cymreigyddion Hall）を建てている。ホールはウェールズのエンブレムやバルド（詩人）、「ナショナル・コスチューム」の女性たちできらびやかに飾られていた（Fraser 1965-66 : 47）。ホールでは、アベルガヴニー・アイステッズヴォッド（Abergavenny Eisteddfod）が、コートではアイステッズヴォッドの際にはきらびやかな舞踏会が開催されている。地元の侯爵の娘たちや、ラノーバー夫人の義兄、プロシア大臣ブンセ

ン（Christian Carl Josiah Bunsen 1791-1860）の紹介によるトルコ、サルジニア、オランダの大使など、多数の名士が招かれていた。

このような舞踏会は、「ナショナル・コスチューム」を着るべく想定された農民たちとは全く無縁の世界だったことは言うまでもない。そしてこのような社交的雰囲気の中では、ウェールズ語よりも英語が幅を利かせていたのである（Olding 1986 : 6）。イングランドとの心情的な結びつきは、たとえば1848年開催のアベルガヴニー・アイステッズヴォッドにも見て取れる。Fraser（1965-66）によれば、この時は女王の許可によりプリンス・オブ・ウェールズをパトロンにアイステッズヴォッドが行われることになり、ラノーバー夫妻やトマス・プライスの気分は高揚していたとある。現在、ウェールズ人のほとんどがロイヤル・ファミリーに好感を持っていない事を考えあわせると（1996年、エリザベス女王がウェールズ大学を訪れた際、女王を大学構内に入れないように学生のデモが起こった）、ラノーバーを巡る人々の心情は、一般民衆とはかけ離れていたものであったろうと推測できる。こうしたイングランドと上流社会の結びつきを示唆するのが、ヘンリー・ハラム（Henry Hallam 1777-1859）の演説である。彼は、今までアイステッズヴォッドはウェールズの音楽、文学、衣装などだけに興味があるのだと考えていたが、王家に忠実であることがわかり好感が持てた、と述べている（Fraser 1965-66 : 201）。もちろんこの年も華やかなドレスの舞踏会が行われていた。

なるほどラノーバー夫人は自分でも「ナショナル・コスチューム」を着て、その扮装の肖像画が彼女の設立した大学に残っていたり、*Illustrated London News* (1845, Oct. 25)の挿し絵では、アイステッズヴォッドの行進で馬車に乗った上流婦人たち、沿道を埋める人々や観客が「ナショナル・コスチューム」を着込んだりしている（264-66）。しかし上流階級の衣装は、ロンドンの流行を追ったもので、頭にはビーバーハットではなくファッショナブルなボンネットを被っていた。

「ナショナル・コスチューム」は、ラノーバー夫人たちが日常着用するような服装ではなかったが、農作業には不向きなほどきれいでもあった。それは、労働の泥にまみれた農民服が、きらびやかな晴れ着に変容させられたようなものであり[9]、働かない彼女たちが頭の中で考えた、働く人々の「伝統」の表象にすぎなかった。冒頭に掲げたように「ナショナル・コスチューム」を実際に着るのは Welsh Lady であって Welshwoman ではないのである。ラノーバーたち上流階級の婦人たちが「民族的機会」にだけ着ることにより、農民服という現実味を失ったこの晴れ着は、しかしながらラノーバーによって、元々は働くための服として構想されていたのであった。つまり「ナショナル・コスチューム」は、現実の裏付けのない「労働着」として、抽象的な「労働者」に着せられる。ラノーバーたちのまなざしにより、きれいな服を着た「労働者」の「きれいな身体」が出来上がる。ラノーバーもエッセイの中で注として引用している *Glamorgan Monmouth and Brecon Gazette, and Merthyr Guardian*(1834)への手紙で、ある読者は、来るべきアイステッズヴォッドで「ナショナル・コスチューム」がテーマの一つになっていることに賛意を表した後、次のように述べている。

> ... the elegance of the costume itself and the novel feature it will form upon that interesting occasion, as well as in the surprise you express that so much capability should have been allowed to remain so long unnoticed, ... a hope that the effects of this very public spirited arrangement will prove much more permanent than the mere

festival in which it originates, and that they will extend themselves to other classes of the community besides those who may honour it with their patronage and presence. (May 24, 3)

ラノーバーのまなざしにより、「ナショナル・コスチューム」は概念としての「労働者階級」(“other classes of the community”) を表象したものとなるのである。

6．ウールとコットン

ここで注目しておきたいのは、「ナショナル・コスチューム」は旅行記のように単に紙の上に書かれているだけではなく、ウールという素材を使って実際に作られたということだ。これにより、「ナショナル・コスチューム」に経済的付加価値が与えられるばかりでなく、イングランドに対するナショナリズムの新たな砦ができあがるのである。

前述したイベットソンの描いた衣装は、19世紀に入ると廃れてくる。産業革命の影響で、一般のレベルでもウールに代わり、イングランドからコットンが廉価で大量に手に入るようになったからだ (1800年には既にコットン産業はウール産業を上回っている) [10]。ウェールズの家内産業も崩壊の危機に瀕していく。そしてまさにこのような衣装が姿を消そうとするときに、ラノーバー夫人は「伝統の創造」を行う[11]。ラノーバーはエッセイの中で、ウェールズ産の衣装が着用されなくなり伝統が喪失しつつあるのは (“the Costumes for the Principality, which of late years have fallen greatly into dis-use” 9)、ウェールズの外から贅沢品、コットンが入ってくるから (“the introduction of foreign luxuries in articles of dress”) と述べている[12]。それに対してウールは、ウェールズの変わりやすい気候には最適であることが指摘される[13]。

The costumes of Wales being chiefly composed of wool, are from the nature of the material particularly well adapted to defend the wearer against the inclemencies of the weather, and the sudden transitions from heat to cold to which our climate is subject; (9)

そして、地元のホームメイド (“the garment of home made manufacture”)、つまりはウールを着ることが、ウィーバーの育成など産業に貢献し[14]、ウェールズをイングランドの侵害から守り、発展に繋がるということになる (“The prosperity of the principality must of necessity be better forwarded by the home consumption of her native produce.” 11)。「ナショナル・コスチューム」の持つ経済的効果が、文化的アイデンティティーと結びつけられて論じられているわけである。こうした産業家的視点は、ビジネスで財をなした新興ジェントリー (夫人の父も夫もこのタイプ) に特有のものであったと思われる。

さらに重要なことには、ラノーバー夫人にとって「ウール」は、ウェールズの民族的特性、すなわちウールの下の「きれいな身体」の何たるかを指し示すものであった。まず第一にそれは健康な肉体でなければならない。ラノーバーは、ウールは「健康に適した素材」(“healthful material”) であると述べている。民衆の健康への気遣いは、母親あるいは年老いた祖母と若い娘の服装の違いを例に更に続けられる。

.... the hale and robust mother of fifty, and even grandmother of eighty, returning from church or market secure from the storm, under the protection of the warm woollen gown, and comfortable cloak or whittle of Gwent or Dyfed, with a neat and serviceable beaver hat, and black woollen stockings, pursuing her houseward path unobstructed by the influence of cold or wet, while the delicate and cotton clad daughter or grand-daughter, with perhaps the symptoms of consumption on her cheek, is shivering in the rain, seeking the precarious shelter of the nearest hedge, or shifting her station from tree to tree, to avoid the soaking of the shower, while her flimsy straw bonnet, saturated with water, and dyed like a rainbow by the many coloured streams descending from its numerous and once gaudy ribbons, ... (11)

ここで興味深いのは、昔ながらの衣装に身を包んだ母親は「力強く健康的でたくましく」（"hale and robust"）、イングランドからの流行の服を着る娘は「おそらく頬には肺病の兆し」（"perhaps the symptoms of consumption"）と描写されていることだ。伝統的労働着が健康な身体に結びつけられているのである。この時代、健康であることが多大なる関心を集め始めていた。1831年から33年、36年から42年にはインフルエンザが猛威を振るっている。このような度重なる病気の脅威の下で、身体が意識的に捉えられるようになっていた。おりしも1832年 the Anatomy Act で、身元不明の死体は解剖に回されることになり、身体の新たな知識が増大してくる。それを裏付けるように、1800年以降それまでにない多くの者が医者を目指すようになった。ラノーバー自身も身内の者多くの看護に献身的に当たっている。健康な身体に着目するのも自然なことだったろう。

第二に、この健康な身体は労働をすべき身体なのである。若い娘がイングランドからの服にうつつを抜かすのを健康面から気遣ってはいるが、これは実はこの様な服が労働に適さないということなのだ。

It is a fact universally allowed by all competent judges of housekeeping, that the best servants are invariably those who have been early exercised in every different branch of housewifery, but of late years a false standard of respectability has been established, which has in a great many instances effected such a change of costume, as is utterly incompatible with a proper discharge of household and agricultural duties — What woman, dressed in the thin and comfortless materials, now so frequently substituted for the substantial produce of the Cambrian loom, is capable of properly discharging the duties of the dairy, or many of the other necessary occupations which in every family, from the Peer to the Cottager, must entirely depend upon female exertions? (10)

そして、健康で勤勉な労働力は、ウェールズの発展（"peculiary interests of the people at large" 11）に結びついていく。

...health and industry, which are the first steps to happiness and prosperity, and the best

eventatives of poverty and immorality. (13)

上から労働者の健康を気遣う彼らは、しかしながら、下から自分たちのテリトリーを侵されるのには我慢が出来なかった。ジェントリー中心の固定された社会への脅威に敏感だった。ラノーバーも注として引用している *Glamorgan Monmouth and Brecon Gazette, and Merthyr Guardian* (1834)に明らかである。

...when each class abondons its natural sphere, and struggles to attain the level of those above it, order and peace cannot be maintained. (May 17, 3)

また、ラノーバーの夫ベンジャミン・ホールの下層の者たちへの視点は以下のチャーティストに関する手紙に見て取れる。

I find today that the feeling is strong against the whole body of The Chartists. What the English detest more than all is cowardice and this crime, as it is in their estimation, was exhibited so strongly yesterday both by the 'moral' and 'physical force' leaders that they have become contemptible and hateful.[15]

きらびやかな「ナショナル・コスチューム」の下で、実際はどうであるかは別にして、労働者は家庭で健康に気を使い、「きれいで」役に立ち、従順に文句を言わずに、労働力を提供すべきなのだった。1789年、民衆パワーの爆発したフランス革命を目の当たりにしたジェントリーたちによって、自分たちのテリトリーを侵犯することのない「従順なる身体」が構想されていたわけである。

... proper pride which is derived from the practical knowledge and exercise of every variety of household occupation, and they considered that health and strength should constitute the sole limits of domestic industry, and be the only boundaries to domestic usefulness. (Hall, 1834, 10)

そして「従順な身体」の表象として選ばれたのは、家庭でホームメイドの服を作り整える女性だった。女性は家庭で、子供たちの教育に責任を負っていたという点で、ウェールズ語を核とする文化の守り手でもあった。ラノーバーのエッセイも明確である。"every Welsh female" (12)であって"man"ではないのである。ここでは冒頭のウェールズのイメージとは逆に、男性的身体は無視されている。

ダブル・スタンダードにおいて女性の貞節さに、財産、つまり男性の所有物としての価値が付与されていたように、女性として表象された「きれいな身体」は、ジェントリーの財産としての価値があった。それは従順に労働力を提供するだけでなく、男性的な労働者の身体を隠蔽することにより、上流階級のきれいな身体を守る役目を負っていた。先に挙げた昔ながらの服を着た母親や祖母の、たくましさ（"robust"）に溢れるままの身体は脅威なのである。「ナショナル・コスチューム」で化粧を施されなければならなかったのだ[16]。ラノーバーたちがアイス

テッズヴォッドや舞踏会などの「民族的機会」に演じる「労働者」は、俳優同様「きれいな身体」であり、観客であるジェントリーに理解可能となる。労働者のたくましい肉体は、華奢ではあるが高いモラルを持った制御可能な身体に取って代わられる。そしてこの「きれいな身体」を労働者の表象と見ることにより、ウェールズという、ジェントリーを頂点とするアルカディアは安泰となる。この世界への脅威となるようなたくましい肉体は抹殺される。

ナショナル・コスチュームは、ラノーバー夫人がウェルシュ・リバイバルという時代の風を受けて創り上げた「伝統」であった。それは単なる作り物という枠を越えて、イオロのゴルセッズのようにウェールズ人の中に根付いていく。上流階級の女性が演じていた「リスペクタブルな労働者」を、今度は本物の労働者自らが演じ、ナショナル・コスチュームは、他者の目を意識し「きれいになる」ための舞台衣裳となっていく[17]。現在、ウェールズをもっともよく表象する絵画と言われるボスパー（Sydney Curnow Bosper 1866-1942）の『サレム』（*Salem*, 1908）では、ナショナル・コスチュームを着た老婆がチャペルの中に描かれている。実在したこの老婆は、イングランドから訪れた画家のモデルとなるため、ナショナル・コスチュームの正装を華美なショールで飾って現れたのだった。晴れ着としてのナショナル・コスチュームは、ウェルシュ・ドレッサーのように、母親から娘へと代々受け継がれ、「ウェールズの伝統」のシンボルとして実際に機能するようになっていったのである。

注

1．ウェールズの「民族文化大祭」で、ウェールズの南北交互に毎年開かれる。詩、散文、合唱、朗読に演劇などのコンテストに加え、様々な民族工芸品が展示される。

2．Hobsbawm, E. and Ranger, Terence, eds., *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge UP, 1983。ウェールズの事例としてそこでも言及されているアイステッズヴォッドの「創出」に関しては、拙論（Morino 1995）を参照のこと。

3．中世の文学、あるいは遺言、家政の記録、手紙など様々な資料に当たった結果、Payne（1964）は以下のように結論づけている。

> In all this enormous mass of evidence I have never met with any suggestion of a national costume for either men or women. There is no evidence that Welsh poeple of position, or of substance, dressed differently from those of similar rank in other countries. They simply followed the general fashions of the day, although, as elsewhere, not all at the same rate. (42)

4．*Illustrated London News*, 1854, December 2, 559-60. 全てがウェールズ語で行われるこのチャペルはラノーバー夫妻が建てたのだが、周囲のチャペルが次々と英語で説教を行う現在も、ラノーバー夫人の遺言により、その地域で唯一ウェールズ語を使用している。

5．Etheridge (1977) の指摘するように染め物の原材料の地域差により色合いが違うことは多少あったではあろう。

6．1838年10月のアイステッズヴォッドにはブルターニュからも参加があり、アイステッズヴォッドの歌がブルトン語、ウェールズ語、英語で歌われている。これは19世紀後半の汎ケルト的なアイステッズヴォッドの先駆けをなすものである。ウェールズとブルターニュの橋掛け

の役目を果たしたのは、ラノーバー夫人の姉のブンセン男爵夫人(Baroness Bunsen, nee Francces Waddington 1791-1876) であった。妹とは正反対にウェールズには興味を示さなかったが、独仏伊語に堪能だった彼女は1832年ブルターニュのナショナリスト、フランシス・アレクシス・リオ (Francis Alexis Rio 1797-1874) をラノーバーに招いている (Fraser 1960 : 288)。

7．カーディフ・アイステッズヴォッドに関しては以下を参照のこと。*Glamorgan Monmouth and Brecon Gazette, and Merthyr Guardian*, 1834, August 23.

8．ラノーバー・サークルは、たとえばシャーロット・ゲスト夫人が『マビノーギオン』を8年かかって翻訳した際、多大な援助を与えている。中世ウェールズ文学の英訳者として名を馳せているゲスト夫人は、しかしながら夫の死後再婚し、ウェールズをきっぱり忘れてしまい、イングランドに移住した (Fraser 1965-66 : 288)。ラノーバー夫人自身は、ウェールズの教育のために Llandovery College の創立に力を尽くしたり、ジェイン・ウィリアムズ (Jane Williams) が *Ancient National Airs of Gwent and Morgannwg* を出版する際、援助をしている。これは1837年アベルガヴニー・アイステッズヴォッドで賞を取った、今でもウェールズの歌曲集として忘れられないものである。

9．Lewis (1994-95) は、ジョージ・ボロー (George Borrow 1803-81) が *Wild Wales* (1862) として結実する旅行を行った1854年には、この美化されたイメージが広まっていたことを指摘している。

10．これももちろんウェールズだけに限らずイングランドでも見受けられたことであった。ただビーバー帽に関しては Malkin (1807) の記すように、いくらか息の根が長かったようである。

> The dress in Glamorganshire is not so strongly marked as in most other counties, except that the women universaly adopt the man's hat ... (66)

11．Morgan (1981) の指摘するように、それが消滅しようとする時に「伝統」が創造されるのは興味深いところだ。

12．Morgan (1791) は次のように嘆いている。

> ... the common people in the large towns deviate widely from their primitive simplicity, and imitate, in a very slovenly and awkward manner, the English mode ... (273)

13．コットンは洗濯が容易であるという点では健康的であったことを Ewing (1984 : 62)は指摘している。

14．Price (1854-55 : 244)には、1838年アベルガヴニー協会がフランネル産業の育成について話し合ったとある。また、フランネルという言葉は、ウェールズ語の"gwlanen"よりきている。

15．Fraser (1965-66 : 209)より引用。

16．このテーマは、Abraham Solomon が1855年に描くことになる *The Contrast* (1855) などに受け継がれていく。そこでは、車椅子に座り、夫に優しく守られている色白の女性が、ペティコートをたくし上げ、たくましい脚を露わにした漁師の女性に対比させられている。病弱な身体からは、裸足で自由に浜辺を歩き回る精力は奪われている。

17．「ナショナル・コスチューム」は、イングランドからの旅行者の「ルーラル・ウェールズ」を求める視線を浴びながら、ますます美化され画一化されていく。早くも1821年、ある旅行者は次のように記している。

Dress of the women, a blue cloak and man's black beaver hat, makes them good figures in a landscape, though a Red cloak would be better (Newell 1821 : 61).

そして現在、ニューウェルの期待に応えるかのように、赤いガウンを着込んだ人形がどこの土産物屋にも並んでいる。

図1　「ナショナル・コスチューム」を着込んだ人形。

図2　ラノーバー夫人による「ナショナル・コスチューム」。ウェールズ国立図書館。

図3　J. C.イベットソン、『スランゴスレンの通り』ウェールズ国立図書館。

参照文献

BEDDOE, Deirdre. 'Images of Welsh Women', in Curtis, T. ed., *Wales : The Imagined Nation : Essays in Cultural and National Identity*. Bridgend : Poetry Wales P., 1986, 227-34.

BORROW, George. *Wild Wales : Its People, Language and Scenery*. London : John Murray, 1923. (First edition, 3 vols., 1862).

BUSBY, T. *Costume of the Lower Orders of London*. 1820.

CLARKE, Simone. 'The Construction of Genteel Sensibilities : The Socialization of Daughters of the Gentry in Seventeenth- and Eighteenth-Century Wales', in Betts, Sandra ed., *Our Daughters' Land*. Cardiff : U. of Wales P., 1996.

COMBE, William. *Tour of Dr Syntax in Search of the Picturesque*. London : Routledge, 1813.

DE MARLY, Diana. *Working Dress : A History of Occupational Clothing*. London : B.T. Batsford, 1986.

ELIOT, George. *Adam Bede*. London : William Blackwood and Sons, 1859.

ETHERIGE, Ken. *Welsh Costume : In the 18th & 19th Century*. Swansea : Christopher Davies, 1977.

EWING, Elizabeth. *Everyday Dress : 1650-1900*. London : B.T. Batsford, 1984.

FRASER, Maxwell. 'Lady Llanover and Her Circle', in *The Transactions of the Honourable Society of Cymmrodorion*, session 1968, Part II, 170-96.

..... 'Sir Benjamin and Lady Hall in the 1840's', *The National Library of Wales Journal*, vol. 14, 1965-66, 35-48, 194-213.

..... 'The Waddingtons of Llanover 1791-1805 : Reminiscences of Baroness Bunsen, nee Frances Waddington', in *The National Library of Wales Journal* Vol.11, no. 4, 1960, 285-329.

HALL, Augusta, Lady Llanover. 'The Prize Essay on the Advantage Resulting from the Preservation of the Welsh Language, and National Costumes of Wales', in *Gwent and Dyfed Royal Eisteddfod 1834*.

HOBSBAWM, E. and Ranger, Terence, eds., *The Invention of Traditition*. Cambridge: Cambridge UP , 1983.

LEWIS, Jacqueline. 'Passing Judgements -- Welsh Dress and the English Tourist', *Folk Life*, vol.33, 1994-95, 29-47.

MALKIN, Benjiamin Heath. *Scenery, Antiquities and Biography of South Wales*. London: Longman, Hurst, Rees and Orme, 1807.

MATTHEWS, William. *The Miscellaneous Companions*: Vol. 1: Being a Short Tour of Observation and Sentiment through a part of South Wales. Bath: R. Crutwell, 1786.

MORGAN, Mary. *A Tour to Milford Haven in the year 1791*. London: John Stockdale, 1795.

MORGAN, Prys. *The Eighteenth Century Renaissance*. Llandybie: Christopher Davies, 1981.

MORINO, Kazuya 'The Making of the Eisteddfod', *Reports of Faculty of Liberal Arts, Shizuoka University, Humanities and Social Sciences*, vol. 31, 1995.

NEWELL, R.H. *Letters on the Scenery of Wales, including a series of subjects for the pencil*, London: Baldwis, Cradoc & Joy, 1821.

OLDING, Frank. 'A certificate of membership of the Abergavenny Cymreigyddion Society, 1837', *Gwent Local History*, no. 61, Autumn 1986, 4-8.

PAYNE, F. G. 'Welsh Peasant Costume', *Folk Life*, vol. 2, 1964, 42-57.

PRICE, Thomas, Carnhuanawc. *The Literary Remains of the Rev. Thomas Price, Carnhuanawc*, 2 vols. Landovery: William Rees, 1854-5.

PRICHARD, T .J. Llewelyn. *The Adventure of Twm Shon Catti ; Descriptive of Life in Wales : Interspersed with Poems*. Aberystwuth: Printed for the Author, by John Cox, 1828.

PYNE, William Henry. *The Costume of England, Scotland and Ireland*. 1827.

.... *The Costume of Great Britain*. London: William Miller, 1808.

.... *Etchings of Rustic Figures, for the Embellishment of Landscape*. London: M.A. Nattali, 1915.

..... *Microcosm*. 1806.

ROWLANDSON, Thomas. *Character Sketches of the Lower Orders*. 1820.

WALKER, George. *The Costume of Yorkshire*. 1814.

WARNER, Richard. *A Walk through Wales in August 1797*. Bath: R. Cruttwell, 1798.